

# 依存の回復の過程についての研究

— アルコール依存からの回復を対象として —

○小笠原歩・押江隆

(山口大学教育学部)

## 目的

アルコール依存は完治することがないため回復し続けることが重要であるといわれており、寛解状態の持続に加えて、当事者の自身に対する意識の変化が回復し続けることに関係していると指摘されている(藤田,2017)。また、アルコール依存からの回復は医療機関だけでなく、自助グループへの参加や当事者の家族の支援も関係していると思われるため、それらが当事者の回復にどのように関わってくるのかを知ることはアルコール依存者の支援においてきわめて重要といえる。さらにダルク研究会(2013)では就職活動などの社会復帰活動が依存の精神的な回復には重要であると述べられているが、仕事が回復し続けることにどのように影響しているかを検討した研究はみられない。

そこで本研究では、アルコール依存当事者の方に焦点を当てて、病院や断酒会、家族等のかかわりやアルバイトなどの社会復帰活動の中での気持ちや思いの過程を調査し、その過程が社会復帰活動にどう影響しているのか、検討することを目的とする。

## 方法

**参加協力者** アルコール依存からある程度回復し就職している、かつ断酒が継続している X 氏(男性, 60 代後半)に半構造化面接を行った。

**手続き** 6 月末～7 月初旬の間に、ある大学の面接室で、1 時間程度の半構造化面接を行った。主な質問内容は、アルコール依存になった経緯、お酒をやめて就職活動をするまでに役立ったことや邪魔になったこと(病院や自助グループ、他者からの支援など)、アルコール依存からの回復をどのように定義づけているか、であった。

## 結果

半構造化面接によるインタビューを TEM(安田,2012)により分析した結果の概要を以下に示す。TEM における概念を〈 〉で表す。

病院に通院や断酒会の活動を行って 8 か月たったころ、X 氏は友人から〈アルバイトを紹介〉され〈面接に行くことにした〉が、面接のときに〈アルコール依存症を言うべきかどうか葛藤した〉。言わなければ自分が依存症だということがばれない限り

は知られないのでいいのだが、〈後で知られたら自分が依存症だということをうまく説明できるかどうか分からないと考える〉、その場で〈アルコール依存症だということを告白〉し、〈面接の時点でアルコール依存であることを理解された〉。その出来事から X 氏は〈職場への好印象〉を感じ、その職場でアルバイトをすることを決意し、そして実際にアルバイトをすることになった。

## 考察

X 氏は断酒会でお酒についての体験を繰り返し語ることで、自身のアルコール依存と向き合い受け入れられるようになったため、アルコール依存について熟考することができた。そのため、アルバイトでの面接の場面で依存症が知らなかったらいいのではないかと考えるだけでなく、依存が知られてしまった場合についても考えることができ、依存症を告白したほうが良いという判断ができたのではないかと考えられる。

また、X 氏の「人と関わることで、断酒を続けることは自分だけの問題ではないと感じることができた」という発言があったが、ダルク研究会(2013)は、人と関わることで断酒を続けることを阻害するような事例を示している。以上より、ある程度回復していないと人との関わりが良い影響に働かないことが示唆される。X 氏の場合は断酒会の例会で自分の経験を話したり人の話を聞いたりする体験から過去の掘り起こしを行う中で自分の飲酒による影響などを納得できる状態であった。そのため、依存からの回復がある程度進み、人との関わりが良い影響として働いたと思われる。

今後の課題としては、仕事などの社会復帰へ向けた活動が、断酒を続けることへの良い影響になるにはどのようにしたらよいかという点について、重点的に調査する必要があると思われる。また、複数人のインタビューを実施し、さらなる分岐点等を検討することも必要と言えるだろう。